その3　里山から学ぶ

木林学のススメ

中川 典子

山の荒廃、虫たちの受難

夏休みに欠かせない昆虫採集。主役はクワガタやカブトムシでしょう。ところが、友人の子供に尋ねると「クワガタならスーパーにいるよ」と教えてくれました。クワガタやカブトムシなどの虫取り経験のない子どもたちが増えています。

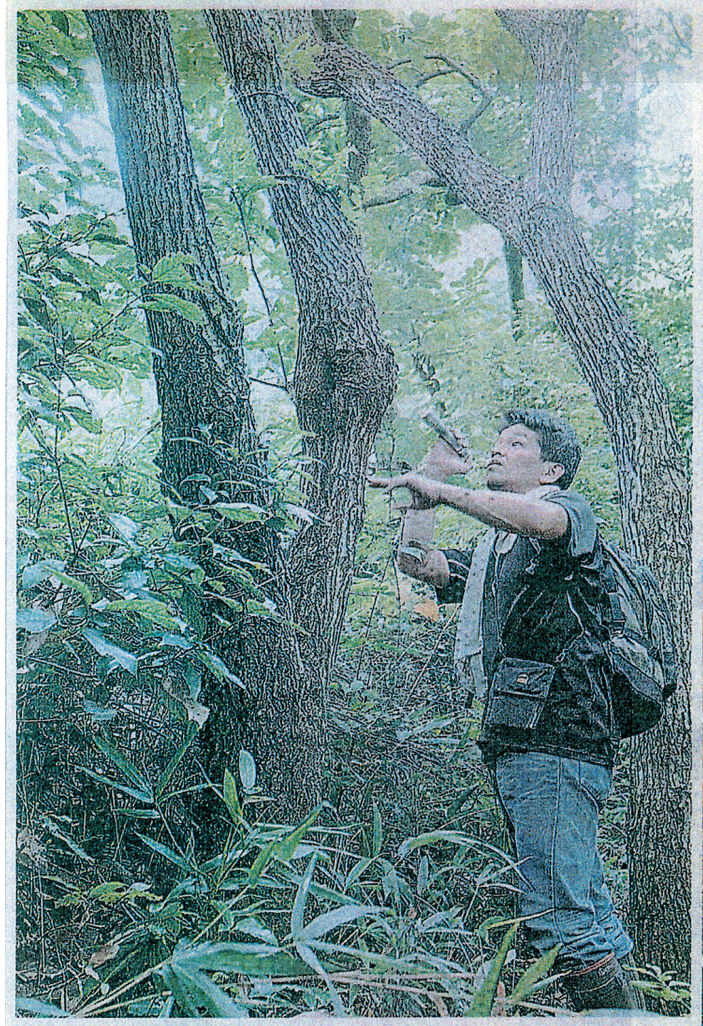
特にクワガタは子供から大人まで根強い人気があり、値段も大変高価です。クワガタ名人平山貴也さんは、全国でも有名な、この道四十年のベテラン。毎年、クワガタを追いかける平山さんに虫たちの行方をうかがうと「クワガタたちは、樹液を出すクヌギや楡、コナラなどの雑木林に生息します。数年前から里山や雑木林が荒廃し、田んぼの畦木もなくなり、虫たちは山の奥のほうに追いやられていると思います」と答えが返ってきました。

里山の雑木林でクヌギやコナラを伐採し、かつての日本人は、薪や炭などの燃料としてきました。それが、石油や石炭などの化石燃料に変わると、人の手が入らなくなり、管理も植樹もされなくなったのです。

平山さんの案内で里山を歩きました。最近は、下草が刈り取られず山道がわかりづらかったり、手入れされていないために、木が生い茂り、林が薄暗くなっているそうです。伐採されたクヌギの根株を養分としてキノコが生え、またそれを養分としてクワガタの卵が成長します。樹液のよく出ているクヌギの大木の根元で、クワガタの死骸を見つけました。タヌキなどが餌にしたのでしょう。自然のサイクルを見せつけられた気がしました。

「全国的に里山は手入れ不足。放置ゴミに悩まされ、山を閉鎖したり、間伐しないためにうっそうとしていたり。昔なら五月末から虫が騒ぎ出したのに、一カ月くらいずれてきています。気候の変化だけでなく、里山の環境悪化もあるのでしょう」と平山さん。確かに、広葉樹がある里山は、風が通り、なんだか明るく、葉っぱを透けて太陽の光がやわらかく注いでいました。スーパーでは、買えない虫取りの思い出。クワガタやカブトムシと共存できる環境を取り戻すには、身近な里山の豊かな財産を改めて見直すことが必要なのでしょう。

（銘木業見習）



左はクヌギの木穴に、昼間は寝ているクワガタを探す平山貴也さん。右は3年から5年生きるという神秘的なオオクワガタ（右側）やノコギリクワガタ㊤と、自然のサイクルとはいえ、小動物に食べられてしまったカブトムシとクワガタの死骸

典子のポイント

木の音を聞く　鼓動、葉音、命のアンサンブル

私が銘木屋を目指そうと思ったのは、やはり木の目利きだった祖父の影響です。小さいころ、周辺の山々によく連れて行ってもらい、幹に耳をくっつけて「木の音聞きごっこ」をしました。小さいころから木に慣れ親しんだことが現在につながったと思います。

最近では、自然とより遊ぶために木の鼓動を聞く「聴診器」があります。クワガタの木の向こうからトントンとたたけば響いてくるかな？　聞こえた音を記録してみよう

いそうな樹液たっぷりのクヌギの木に当ててみると「ザーザー」と音がしました。クワガタのいる木には、ハチやカナブン、チョウ、テントウムシなども集まっています。みずみずしい木が虫を引きつけるのでしょう。細い柏は「コポコポ」、欅は「ジュージュー」。木も生きているのだと感動します。でも、街中の公園の街路樹は、里山の木々よりも勢いがなく、聴診器では、弱々しい音がかすかに聞こえました。

クワガタ名人、平山さんはクヌギの根元にある穴に耳を当て、虫が動く騒がしい音を聞くそうです。

里山に身を置くと、風にそよぐ葉音、鳥の声、水の流れる音などが気持ちを落ち着かせてくれます。クワガタやカブトムシがいなくなる自然は、私たちにも悪影響が現れるでしょう。里山を持つ山主さんに迷惑を掛けないようにマナーを守りながら、子供たちと一緒に自然のすばらしさを楽しんだり、学んだりすることが、自然と共存する第一歩だと思います。

メモ　京都市下京区の京都高島屋で8日から13日まで開かれる「びっくり！エコ100選2007」の森のブースで、平山さんが採集に協力したクワガタが展示される。森林バイオマスなどについても学ぶことができる。

毎月第1週に掲載します。